

第97話「父と私と」

in the shade of family tree

木陰の物語



田 士郎

「父親がユニホームを買ってくれて…」

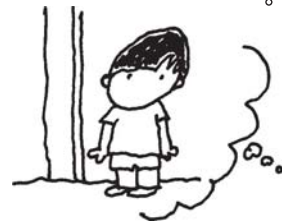


「子どもの頃は野球少年だった」と語り合う友人を見ていた。

かわりにアウトドアに興味があった。



父はあまりスポーツに関心を持たなかった。



私の経験は全く違ったなあと思った。

終戦後十数年、まだ日本全体が貧しい時代だった。



昭和初期にいろいろ経験したらしい。

そんな頃、父に連れられて
山間の溪流で
飯盒炊さんなるモノを
経験した。

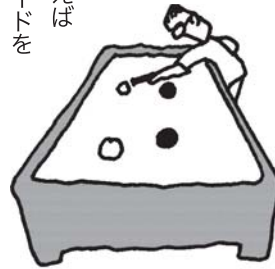


今思つと、
何でもないことだが
その時食べた
屋外でのすき焼きは
強烈だった。

私はすっかり
アウトドア派になった。



高校では山岳スキー部に所属し、
夏山遠征、冬のスキーを楽しんだ。



そういうのは
ビリヤードを
教えてくれたのも父だ。



ルールに従つと、
台の側で延々と
父が突いているのを
見ているだけだったが。

どこかしら、
子どもの頃の私は
父が苦手だった。



わいはい

大人になって理解したのだが、
要するに父は自己中だった。



「わしが、わしが...」
といつも言っていた。

そんなことを言えば、
今の私がそうだと
我が子達に言われそうだが、



もしそうなら遺伝と云うべきか、
父親とはそういうものだ
と云うべきか。



それはともかく、
長男だった私は、
いつも父親が喜ぶよう
気遣っていた。



そのことには
早い時期から気がついていた。



心の負担だったとか、
心の傷などと言いたいのではない。



それも含めて、
私は私になった。



ある時、町の古い公会堂のことが
話題になった。



「知っている！」
と話すとても喜んだ。



父はそのすぐ側で
育ったらしかった。

「最近どうなっているか
知らないが…」



懐かしそうに
語るのを見て、
あやふやな記憶で
公会堂の最近の
エピソードを話した。



するとたいそう喜び、
久しぶりに
行ってみたいなあ
とまで言っていた。



ひと月ほど後、
まったくの別件で
その公会堂近くに
一緒に出かけることになった。



困った。



話を盛ってしまった自分の
言葉に焦っていた。



喜ばそうとしたことが、
アタになることを恐れた。



結果的には、
父は私の話を覚えてもおらず、
公会堂の近くに來ていることにも
関心がなかった。



誰にも知られないところで、
ホツとした。



私はそんな息子だった。

